

独自R-2R DACを搭載

「音質最優先」を貫く 孤高のイヤホン

独自の小型R-2R DAC「HYMALAYA DAC(ヒマラヤ・ダック)」を搭載し、
唯一無二のサウンドを目指した完全ワイヤレスイヤホン「SVANAR WIRELESS」。
HIFIMANの平面磁界駆動型ヘッドホンを彷彿とさせる澄んだサウンドの魅力を解説しよう。

文／高橋 敦 Atsushi Takahashi
写真／阿部良寛



HIFIMANの2つの中核技術を 完全ワイヤレスに結集させた

ポータブルオーディオを黎明期から盛り上げ続けてきた名物ブランド、HIFIMAN。本格派のヘッドホンやヘッドホンアンプをリリースしている印象が強いだろうか。しかし彼らの興味はそこだけにとどまらない。ヘッドホンだろうがイヤホンだろうがワイヤードだろうがワイヤレスだろうが、ポータブルオーディオのあらゆるスタイルに向けて最高の音質を提供したい。それが彼らの望むところなのだ。であれば現在においては必然、完全ワイヤレスイヤホン(TWS)も彼らが射抜くべきターゲット。それに向けてHIFIMANが放ってきた決定的な一撃こそ、この「SVANAR WIRELESS(スヴァナー・ワイヤレス)」だ。

同社はこのモデルを「HIFI TWSの完成形」と呼ぶほどに自信を持っているが、内容を知ればそれも納得。このモデルは、同社有線イ

ヤホンの最高峰と自社DAC/ヘッドホンアンプの最新世代、そのふたつの中核技術を完全ワイヤレスイヤホンに投入し融合させることで完成されたものなのだ。

有線イヤホンの最高峰「SVANAR」から受け継ぐのはHIFIMANが磨き上げてきた振動板技術「トポロジーダイアフラム」。特殊メッキによって振動板表面にナノレベルの幾何学模様を形成。その幾何学模様の形状、厚み、配合成分によって周波数応答特性を制御するという技術だ。有線だろうが無線だろうが音づくりの土台はドライバーの特性。トポロジーダイアフラムはまさにそれを引き上げてくれる。

ヘッドホンアンプの最新世代「EF400」から受け継ぐのは独自設計のカスタムDAC回路「HYMALAYA DAC」。他社から供給されるDACチップを使うのではなく、多数の固定抵抗等を組み合わせたディスクリット回路で独自のR-2Rマルチビット型DACを構築。そのサウンドはすでに高い評価を受けている。ただ「多数の固定抵抗等を組み

ノイズキャンセリング完全ワイヤレスヘッドホン

HIFIMAN SVANAR WIRELESS

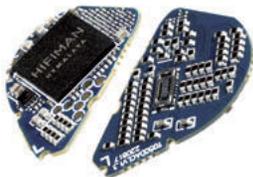
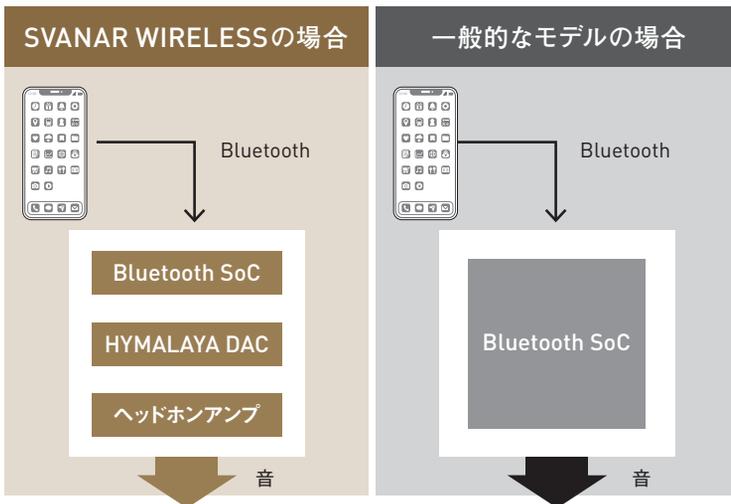
¥79,860(税込) ▶投票 No.053

SPEC ●通信方式: Bluetooth Ver.5.2 ●対応コーデック: SBC、AAC、LDAC ●ドライバー口径: 非公開 ●連続再生時間: 約6時間(ケース込み24時間)※ANC ON、HIFIモードOFF時 ●質量: 8g(イヤホン片耳)、83.7g(ケース) ●付属品: イヤーチップ(シリコン8種)、充電ケーブル



SVANAR WIRELESSの特長

①Bluetooth SoCの他に独自のDACとアンプを搭載



▲HYMALAYA DAC

一般的なモデルは省スペース化をはかる意味でもBluetooth SoCの内蔵アンプを活用するが多いのに対し、SVANAR WIRELESSはBluetooth SoCではデコードを行うだけで、独自の「HYMALAYA DAC」でDA変換を行う。そのため独自のサウンドチューニングが行えたのだ。

合わせたディスクリート回路」であるので小型化は難しい。DAPやポータブルアンプならまだしも、完全ワイヤレスイヤホンへの搭載はポータブルオーディオマニアですらも想像外の離れ技だ。SVANAR WIRELESSはその離れ技を成し遂げている。

加えてノイズキャンセリング、外音取り込み機能、IPX5防水、アイコンックなデザイン性など、ハイエンドTWSに求められる全要素を完備するのだから、HIFIMANの自信満々さにも頷くしかない。

実際に音を聴けば頷きはさらに深くなる。Apple MusicのロスレスストリーミングをLDAC接続/ノイズキャンセリングにて試聴。宇多田ヒカル『BADモード』を聴きはじめるや否や、ギターやシンバルの高音のカチッと硬質な輝きに驚かされた。素晴らしいのは、その硬さが強調感のあるものではなく、楽器の音色として自然に好ましい硬さであることだ。当然ボーカルの感触もナチュラル。LDACによるロスレス伝送、HYMALAYA DACによる正確な信号処理、それを受けて余すと

②人間工学に基づくデザイン ノイズキャンセリングも搭載



イヤホン自体は少々大柄だが、ハウジングの一部にカーボンファイバーを採用することで軽量化を実現。形状も人間工学に基づきデザインされているほか、イヤーチップも8種付属するため装着性は良好だ。パッシブの高い消音効果に加えてアクティブ・ノイズキャンセリング機能も搭載。-35dBのスペックを謳う。

③LDACコーデックに対応 ワイヤレス充電、タッチ操作も

LDAC

コーデックはLDACに対応するため、ハイレゾワイヤレスを楽しむ。ノイズキャンセリング機能をオフにして音に特化した「HIFIモード」を搭載するなど、音質重視の設計を貫く。またタッチ操作を採用したり、イヤホン単体で7時間再生、ワイヤレス充電可能なケース込みで最大28時間再生できたと利便性も高い。

ころなく鳴らすトポロジーダイアフラム。すべて揃っているからこそ音だろう。ホセ・ジェイムズ『Bag Lady』では、5弦ベースの低い音域でのフレーズを横に太らせず下に深く沈み込ませる、抑制の効いた低重心描写に大満足。クラシックギターのソロ演奏、鈴木大介『Over The Rainbow』を聴けばナイロン弦の瑞々しさに感心させられ、ホルルの響きなど空間表現もバッチリ。同じくソロギターのジョー・パス『How High The Moon』では、衣擦れなど演奏者の気配までこれほど豊かに届けてくれるTWSがあるとは、とまた驚かされた。

何を聴いても文句なし。この時点ですでにTWS最強クラス音質であることに疑いはない。なのにこのモデルにはまだ、ノイズキャンセリング&バッテリー消費アップで音質をもう一段引き上げる「HIFIモード」までもが用意されているのだ。「HIFI TWSの完成形」を自ら名乗るとは傲慢な？ いやいやこのモデルはその名乗りを押し通すだけの実力を備えている。